

〔本調子〕 それ伝へ聞く茂林寺の、分福茶釜のその由来、あやしくもまた面白い
昔々そのむかし、婆くつた爺が狸汁、縁の下屋の骨までも

ひろを 広尾の原の狸そば、のびた鼻毛を頬かむり、狸長家を、オオそそり節

やま 山で寝る時や木の根が枕、柴をしよつたら気をつけろ、火の用心さつしやりましよ

オヤ源さん、何処へ穴つぺいりをしておいでだえ、もしちよつとお寄りナ

ヨセ、まだ背中 of やけどがなほらねえア

お気の毒、ここに狸のあんぼん丹、呑んでくだまく、エエなうまくさまんだばさらんだ

狸にござる法印さん、自体われらは田舎のうまれ、月に浮かれて腹鼓、打つやうつつの夢の

世を

狸寝入りかア、あら不思議や、忽ち広がる大巾着

八畳敷の爐にかけし、茶釜しつぽをオヤオヤオヤ、ふりたてて狸ばやしの音につれて

〔二上り〕 或はかるわざ、綱わたり、さてさてさてさて、此度のかるわざは、綱の半ばへ

金玉を引かけ、是を名づけてたんたん狸の、夢の枕ぢや、おもしろ狸の角兵衛獅子

神変不思議の有様は、治まる御代のはなしぐさ、今もその名や残るらん、

今もその名や残るらん